

時短と節約の味方！冷凍野菜が熱い 高品質の北海道産に存在感<北の食☆トレンド>

高橋祐二 会員限定記事

2024年9月22日 10:00(9月23日 23:45更新)

あとで読む



ホウレンソウやブロッコリー、トウモロコシにジャガイモ。取れたての新鮮さをぎゅっと閉じ込めた冷凍野菜が人気です。共働き世帯の増加で調理時間を短縮したい家庭が増えている上、生鮮野菜の価格高騰が続くなか、手軽に使用して価格も安定している食卓の強い味方として需要が高まっているためです。市場規模は直近10年で2割近く拡大しました。冷凍野菜は輸入品が大半を占めますが、実は国内では北海道が有数の生産地です。市場拡大を追い風に、産地に近いメリットを生かした高品質の北海道産冷凍野菜がさらに注目されそうです。

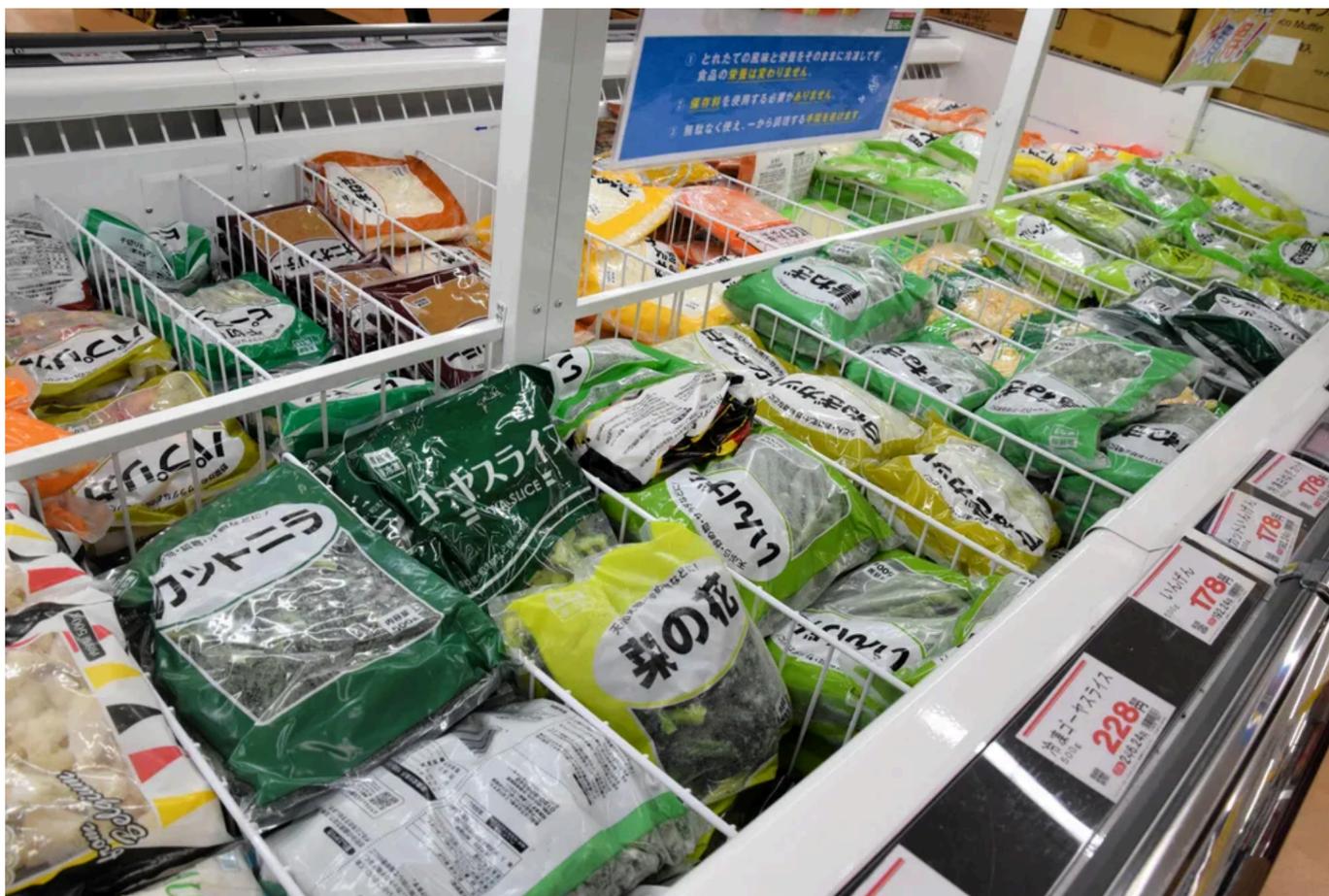
北海道の味覚、旬の食材の話題をお届けする<北の食☆トレンド>の一覧は[こちら](#)



冷凍野菜がずらりと並ぶ業務スーパー北郷店の売り場＝札幌市白石区

札幌市白石区の食品スーパー「業務スーパー北郷店」の一角では、長さ5メートル、幅1メートルはある大型の冷凍ショーケースにぎっしりと冷凍野菜が並べられています。

種類はなんと約60。ホウレンソウやブロッコリー、サトイモといったおなじみのラインアップだけでなく、菜の花やニラといった冷凍ではあまり見かけない野菜もあります。「洋風」「中華」「和風」、複数の野菜をミックスした商品もありました。



業務スーパー北郷店の売り場には菜の花やニラなど変わり種も並ぶ

業務スーパーは神戸物産（兵庫県加古川市）がフランチャイズ方式で展開しています。同社IR・広報課の高木明日香課長は「下処理済みで便利のため共働き世帯では炊事の負担を軽減できますし、高齢者世帯では必要な分だけ使って長期保存できる点も好評です」と魅力を説明します。

冷凍野菜の売り上げは今年に入って前年比約1割増加しているそう。「今年は各種物価が高騰しており、比較的安価で価格変動も少ない冷凍野菜が人気を集めています。これからまだまだ拡大する市場です」。高木課長はこう期待しています。同社は利便性の高さをさらに売りだそうと、「カレー用」「炒め物用」といった用途別の新商品を増やしています。

■国内流通量は10年前より17%多い118.2万トンに

農林水産省によると、冷凍野菜の2023年の国内流通量は118.2万トンです。2012年に初めて100万トンを突破して以降、増加傾向が続いており、市場規模は直近10年で17%拡大しました。

新型コロナウイルス禍によって家で食事をする機会が増えたことに加え、買い物頻度の抑制のためまとめ買いが好まれたことも、冷凍野菜の浸透を後押ししたようです。

手軽さは忙しい現代人に必須の要素。近年は各スーパーで冷凍食品売り場を強化する動きが出ています。

道内大手のイオン北海道（札幌）は札幌や旭川、根室などのイオンやマックスバリュ各店で、改装に合わせて陳列コーナーを広げ、冷凍野菜などの品ぞろえを拡充しています。同じく大手のコープさっぽろ（札幌）も5月から、宅配事業のトドックで冷凍品の取り扱いを700点から1400点に倍増するなど注力しています。

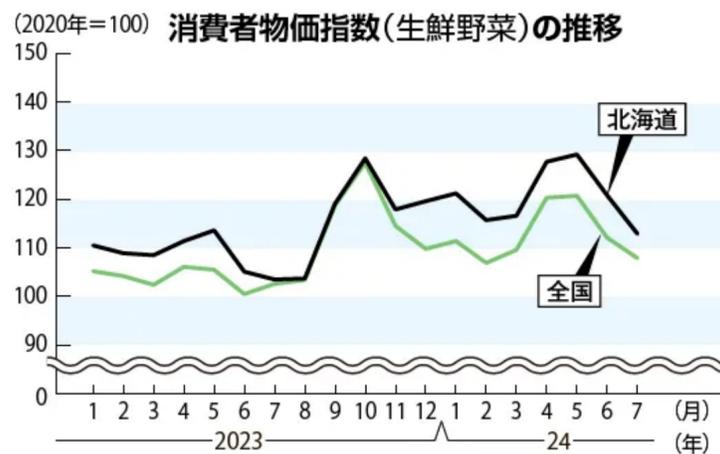


業務スーパーは全国に店舗がありますが、特に北海道内で冷凍野菜の販売が好調だといいます。北郷店で買い物をしていた札幌市白石区の主婦佐藤めぐみさん（47）は「生の野菜は最近本当に高いけど、子どもには野菜も食べて欲しい。値段も質も安定している冷凍も使いつつ、食卓に野菜を取り込んでいます」と話します。

■野菜が高い背景には輸送費との関係も

北海道で冷凍野菜がよく売れる背景には、輸送費と価格の関係もありそうです。総務省の消費者物価指数（2020年=100）では、直近7月の道内生鮮野菜の価格指数は112.9でした。前年同月比で9.1%上昇しており、全国平均の107.9と比べても高い数値です。

道内食品スーパーの担当者は「本州と海で隔てられた北海道は、生鮮品を輸送するコストが高く、その分が価格に跳ね返る傾向がある」と話します。生の野菜が比較的高い環境も、道内での冷凍野菜販売に追い風になっている可能性があるということです。



冷凍野菜の国内流通量の9割以上は、中国など海外産が占めています。残る1割弱の国産品の中で存在感を示しているのが北海道産です。北海道冷凍食品協会によると、2023年の道内生産量は前年比8%増の7万5580トンでした。

全国と比較できる正確な数字はないものの、同協会は「主力であるトウモロコシやジャガイモ、枝豆、カボチャなどは国産の大半を道内で製造している」と説明。冷凍野菜に占める北海道産の国内シェアは9割を超えているとみています。

近年では北海道産ブランドへの引き合いも強く、メーカーでは供給が追いつかない状況だといいます。実際に産地を訪ねてみました。



美瑛町の冷凍野菜専門メーカー「びえいフーズ」の工場（同社提供）

■ 3年間で3割増収、売上高が過去最高に

北海道のほぼ中央に位置する人口約9千人の上川管内美瑛町。中心市街地から少し離れた一画、約5万2千平方メートルの広大な敷地に工場を構えるのが、北海道産冷凍野菜の専門メーカー「びえいフーズ」です。

扱うのはジャガイモやニンジンのほか、季節ごとにアスパラ、スイートコーン、カボチャなど。原材料の7割が地元美瑛町産で、残りの3割を十勝管内芽室町などから仕入れる「100%北海道産」が同社のこだわりです。

取引先を通じて全国のスーパーや食品メーカー、学校給食などに冷凍野菜を供給する同社の2024年3月期の売上高は20億円。直近3年間で3割近い増収となり、びえいフーズとして過去最高を記録しました。

貞広敏明管理本部長は「急速に進んだ円安で、ものによっては海外産の方が価格が高くつくものも出てきました。野菜の鮮度を保って加工できる品質に加え、『北海道ブランド』も強力。商品への引き合いは年々強くなっています」と自信をのぞかせます。



自社の冷凍野菜をPRするびえいフーズの貞広管理本部長

収穫から時間がたつほど甘みが失われてしまうスイートコーンは、収穫したその日に冷凍加工します。産地に近い立地を生かして品質を維持できるのが同社の売りです。

北海道で加工して本州に運ぶとなると、輸送費がかさむため価格競争力が落ちる可能性があります。しかし、常に野菜の生育状況を確認しながら操業できるのが同社の強み。歩留まり率を高めることで、価格競争力を維持できるといいます。

■ 新工場建設で生産能力を1.5倍に増強

同社は冷凍野菜需要の増加を受け、2020年に約31億円を投じて新工場を建設。生産能力を従来の約1.5倍に増強しました。

貞広本部長は「旬に集中して採れる野菜を大規模に加工して全国に送れる体制を整えることで、地域農業の発展を後押ししたい」と力を込めます。

今後も省人化に向けた取り組みを進め、地域の人口が減少していく中でも製造能力を維持していく考えです。

近年は自然災害や温暖化などによって、野菜の価格が不安定な状況が続いています。安定した品質を安定した価格でいつでも供給できる。そんな強みを持った冷凍野菜の市場拡大は、北海道農業にとっても今後さらに重要性を増していきそうです。

